

## ヨークシャー学校小説に見る教員養成の諸相

——時代性・地域性・個性——

武田ちあき 埼玉大学教育学部言語文化講座英語分野

キーワード：学校小説、教員養成、教育実習、ヨークシャー、サッチャー

### 1. 序

教育実習は、教員養成課程のカリキュラムにおいて要となる必修科目であり、学生にとっては人生の命運を左右する一大事である。大学で学んだ理論と技術を教育現場で実践し検証すること、また、教員として求められる指導力や資質を体験的に理解することを通じて、自身の目標と課題を発見するとともに、広い総合的な視野から教育の意義への洞察を深め、教育への情熱を新たにす——そのように教員としてのスタートラインを固めることが、その目的とされる。

日本においては、「後進を育てる」という協力校の厚意のもと、そうした理想が実現する幸運な例も多い一方で、現場の指導教員、ときには管理職による、嫌がらせや八つ当たり、さらには度を越した実習生いじめ・実習生つぶしも後を絶たない。実習生としての意欲や態度など、学生の側に問題のある場合もあるものの、教員の多忙さや指導力不足、教員間の協力関係の欠如、管理職への不信感など、もともと現場にくすぶっていた問題のはけ口となって発現していることも少なくない。そして、実習生を大切にしない学校は、児童生徒をも大切にしていないことがままあり、事はその学校の教育活動の根本に関わる本質的な問題であつたりもする。

翻って、イギリスでは教育実習はどうなっているのか。制度も社会も文化も異なる国との間に画一的な基準を設定し単純にデータを比較してみたところで、たいした意味は見出せそうもない。だが、イギリスにおいて教育実習はどのようなものとして、また、どうあるべきものとして、捉えられているのか、を具体的に知り、その大元にはどんな教育哲学があるのかを検討することは、他の国の教育者に対しても有用な示唆に——さらには新たな啓示に——つながる可能性がある。

イギリスの東北地方を舞台とするヨークシャー学校小説の双璧、ジャック・シェフィールド (Jack Sheffield, 1945-) の「先生」シリーズ (*Teacher series*, 2004-) と、ジャーベイズ・フィン (Gervase Phinn, 1946-) の「デールズ」シリーズ (*Dales series*, 1998-) では、いずれにおいても、主要な登場人物の教育実習体験が活写されており、どちらも元・教員である作家の、それぞれの教育実習観が生き生きと提示されている。

本稿では、この両者の文学作品において教育実習がどう描かれているかに着目し、それを支えている教育観・教員観を探るとともに、教育実習の場面や言及に込められた教育的・社会的・政治的主張を読み解きたい。その鍵になるのが、サッチャー政権の教育改革という時代性、片田舎の農村地帯という地域性、やがて教員となる実習生の人間的な個性、この3つである。

そこに浮かび上がる実習生の姿は、次代を担う子どもたちを育てる上で、常に時代や社会の変化に敏感かつ柔軟に対応していくべき教育界に、これから身を置こうとする人間像の、ひとつのサンプル／モデルを提供することにもなろう。そして、教員を養成するとはどういうことなのかを、抜本的に問い直させる契機にすら、なりうるのである。

## 2. サリー・プリングル——元ヒッピーの女性教員

### 2-1 中堅教員としての姿

シェフィールドの「先生」シリーズは、第1巻『先生、先生！(Teacher, Teacher!)』(2004)刊行以来、国民的人気を博し、現在は14巻にも達している。架空の村ラグリーの物語を彩る多くの登場人物は、日本で言えば『サザエさん』や『ちびまる子ちゃん』のキャラ並みに、連作小説のレギュラーとして、長らく広く親しまれている。

なかでも、ラグリー小学校でひとときわ光るのが、元ヒッピーの女性教員、サリー・プリングル(Sally Pringle)である。「歩く百科事典」さながらに、歴史に造詣が深く、教養豊かな、実力派の中堅教員。こまやかな気遣いと太っ腹な度量を兼備した、頼もしい人柄。中学年担当のサリーは、高学年担当の校長のジャック(作者本人)、低学年担当の教頭のアンとともに、スタッフの一角として揺るぎない座を占めている。

元フラワー・チルドレンのサイケデリックなファッション・センスは、多色ソックスに花柄ワンピース、全身カラフルなボヘミアン・スタイルに発揮され、それが大柄で赤毛、そばかすだらけの顔によく似合って映え、教室では児童に大受け。学校のファッション・アイコンの地位を不動のものとしている。<sup>1</sup>

一方で職員室においては、サリーは自分と対比をなす要素との間で、常時、緊張関係に置かれている。その好敵手が、体制派の事務長ベラ(Vera)である。教区牧師の姉で、地方領主の後妻。時の保守党党首で首相のマーガレット・サッチャーを崇拜し、愛猫にマギーと名付けるほどの心酔ぶり。サッチャー愛用のマークス&スペンサーの紺スーツで出勤する、そのコンサバなでたちは、サリーの極彩色コーデとは噛み合いようもない。

休憩時間に読むものも、ベラは右翼保守派・王室支持派の御用新聞『デイリー・テレグラフ(The Daily Telegraph)』。サリーは左翼リベラル知識人の愛読紙『ガーディアン(The Guardian)』と、進歩的な女性誌『コスモポリタン(Cosmopolitan)』。<sup>2</sup> 掲載記事の内容や扱いは、いちいち、おたがいにカチンときてしかるべきものであり、実際、両者にそうした感情が湧く場面も少なくない。

しかし驚くべきは、そのように購読新聞や支持政党、そもそも出身階級の異なるふたりが、真っ向から対立しているはずの意見の相違を、決して表面化させることがない、という点である。

個人主義を標榜し、他者を尊重することを旨とする英国においては、日本のような同調圧力は希薄であるにしても、また、職場の協力関係の維持を優先する職業的判断が働いているにしても、反論の爆発しそうな瞬間の表情を目ざとく捉えて描き出す、校長としての作者の筆は、両者の行使している自制が並々ならぬものであることを強く匂わせる。

じつは、この相互の黙認の努力こそがベラとサリーの共同作業であり、その根本には、見かけからは量り知れない、ふたりの信頼関係が存在していることが、第12巻『変わりゆく時代(Changing Times)』(2019)で初めて明かされる。ユーモアたっぷりに語られる、サリーの教育実習生時代の秘話。そこには、教員養成のあるべき姿が、ひとつの大きなテーマとして、掲げられているのである。

### 2-2 教育実習での活躍

「先生」シリーズは副題が「裏・学校日誌」だけに、規則正しく、第1巻の1977年度から第10巻の1986年度まで、各巻1年度ずつ物語が進行する。しかし第11巻で舞台は一気に1952年度にさかのぼり、第12巻はその11年後、1963年度の話になる。村人たちの過去や子ども時代

をたどる、この2冊は、本編全10巻の前日談である。これにより歴史的経緯の裏打ちを得て、ラグリー村の物語は一挙に深みを増す。そしてそれは、教員サリーの、メイキング・ビデオにもなっているのである。<sup>3</sup>

1964年、ビートルズとベトナム戦争の時代に、ラグリー小学校へ教育実習生として配属されたサリー・ノブズ(Sally Nobbs)が直面する課題は、旧世代からの反発と、その克服である。

大学の指導教員の推薦状に「優秀な学生」(243)と太鼓判を押されているサリーだが、初日の教頭との出会いは、校庭の木の下で煙草を吸っている最中。日本だったら、一発アウトの「不品行」だが、教頭のリリー自身も進歩派で、当時の校長ジョンの守旧派ぶりに悩んでいたこともあり、リリーはサリーを温かく迎え入れる。

とはいえ、この校長と、当時すでに事務長だったベラには、「あざやかなオレンジのチョッキ、ライム・グリーンブラウスのブラウス、カラシ色のベルボトムのジーンズが、真っ赤な赤毛と派手に喧嘩している」(241)サリーの風体は、反体制派そのもので、ショック以外の何物でもない。

この特異な実習生を現場になじませるため、リリーはサリーを自分の担任クラスに所属させ、直接の指導教員として、熱心に励まし、引き立てて、他の教職員との仲介役を果たしていく。

時代の申し子である若者への、旧世代の偏見をはねのけさせたのは、こうしたリリーの支援に加え、なによりサリー本人の、実習生としての実力だった。ひとつめは、児童に対する授業力。ふたつめは、教職員に対する人間力である。

サリーの優れた適性は、実習初日にして、「生まれつきの教員」(243)とリリーに認められるところとなる。なにしろ、あっという間にクラス全員の名前を覚え、どんどん児童の中に入って行って、良好な関係を構築するし、リリーの助言も積極的に受け入れるのだ。

初日の大荷物、バスで苦勞して運んできたという、束ねた6つの靴箱は、初回授業の「実習生の自己紹介」の教材と判明。児童を6つのグループに分け、ひとつずつ配った靴箱の中に入れてある物品を手がかりに、サリーがどんな人かを推理する、探偵ごっこ。考古学者の方法をモデルにして、頭を使う面白さ、想像する喜び、話し合う楽しさに、子どもたちは夢中になる。質問へのヒントの与え方がまた上手で、思考力・論理力をどんどん伸ばさせる。児童の心をわしづかみにする、創意と工夫に満ちた、新鮮な授業。企画力豊かな実習生の提供する新機軸は、現場にも大きな刺激となる。

そして、サリーの高いコミュニケーション能力の奥に潜む、温かい思慮深さは、ある事件をきっかけに、難敵ベラをも味方に転向させることとなる。

野外調査の授業でサリーのクラスが教会探検に出かけた日、ベラは一同にレモネードをふるまおうと慌てるあまり、教会の門と戸を閉め忘れる。そこへ隣の農場の牛が闖入し、あろうことか、聖水盤に放尿しているところを、サリーが目撃。渾身の力で巨牛を引っぱり出して農場に戻し、物陰でベラに事後報告。自分のせいだ、と青ざめるベラに、サリーは「よろしければ放課後、洗うのをお手伝いします。きれいにすれば、だれにもわかりません」(252)と申し出て、全力で聖水盤を洗うとともに、一切他言せず、ベラの名誉を守り抜く。

「ご親切は決して忘れませんよ」(252)という言葉の通り、その後のベラはサリーに対し、一貫して敬意と謝意を抱き続ける。サリーについて「大丈夫かなあ」(255)と懸念を漏らす校長にも、「とびぬけてすばらしい、若い女性ですよ。まちがいなく、未来を担う若者です。私は本当に、感心しましたとも」(255)と全面的に反論・擁護して、周囲を驚かせる。

実習校がのちに勤務校となるサリー、職業人生をこの一校に捧げることになるベラ。このふたりの終生にわたる絆の基礎が、ここでこうして、種々のカルチャー・ギャップや摩擦を乗り越え、

確立される。シリーズ本編で、ふたりがおたがいの信条を受け入れられない場面でも、あくまで相互に尊重する姿勢を崩さないのは、この、教育実習期間に築かれた、人としての信頼関係ゆえなのである。教育実習とは、プレ初任者研修でもあり、暫定的ではなく永続的な関係につながるものが、むしろ望ましい、という見方もうかがえるプロットである。

60年代の「新しい女」であるサリーは、ベラの「理想の教員像」を確実に変革し、更新させている。実習生が、新しい世代・時代の価値観とライフスタイル、社会の変化を持ち込むことで、実習校そのものをアップデートしているのだ。作品表題の『変わりゆく時代』とは、教育現場が対応すべき一大テーマであり、実習生はまさにその中心にいて、教職員と児童生徒を、むしろ導きさえする立ち位置にいるのである。<sup>4</sup>

さらに作者は、そうした実習生の存在を、現場から浮いたラディカルなものではなく、現場になじむトラディショナルなものとして提示し、より受け入れやすいよう、読者にアピールしている。じつは上掲のエピソードには、伝承童謡のイメージが使われているのだ。

サリーとベラの遭遇した「巨牛教会突入事件」は明らかに、以下のマザーグース、「子牛教会突入事件」のパロディである。

I had a little cow and to save her,  
I turned her into the meadow to graze her;  
There came a heavy storm of rain,  
And drove the little cow home again.  
The church doors they stood open,  
And there the little cow was croupen;  
The bell-ropes they were made of hay,  
And the little cow ate them all away;  
The sexton came to toll the bell,  
And pushed the little cow into the well!

(Opie 26)

わたしのコウシ わたしが 飼った  
くさをたべさせようと まきばへ 放った  
まきばで ひどい嵐にあい さんざん  
コウシは 家をめがけて いちもくさん  
教会の戸が あきっぱなしだ ポッカーリと  
そこでコウシは しのびこんだよ ヒョッコリと  
鐘のヒモは ほしくさで編んであったよ ザックリと  
そのヒモを コウシはたべてしまったよ パックリと  
鐘をならしに やってきたのは 教会守り  
そしてコウシを 井戸へおしこんだよ むりやり！

(スピア 12-17) <sup>5</sup>

昔からある物語を現代風にアレンジすることで、伝統はバリエーションを得て、ますます光る。新しい要素、異分子、個人の才能を取り込むことこそが、伝統の存続と繁栄につながる、という

T・S・エリオットの伝統論に沿えば、文学界のみならず教育界においても、英国の伝統を未来につなげていくのは、まさにベラの言うとおりの、サリーのような若者である。そうした見方がユーモアと笑いのうちに伝わる、なんとも心憎い趣向が凝らされている。

一見「余裕」と見える、こうした表現技法の背後には、じつは切迫した社会事情が控えている。サッチャー主導の教育改革で、個人主義から成果主義・効率主義への大転換を迫られる教育現場。農業中心の産業構造で、学力も進学意欲も、統計的には全国最低のヨークシャー。方言の多くが古英語に由来するくらい、変化を好まない保守的な土地柄。そんな地域性において、いま急を要する「時代をリードする若者」の姿が受け入れられるためには、からめ手から攻める、この技巧ほど効果的なものはない。作家としてのこの方法論には、シェフィールドの教員としての長年の授業経験が、明らかに反映している。

### 2-3 実習校＝勤務校：個性と適応の両立

教育実習で素質も個性も認められ、しかもその実習校がやがて赴任校になる幸運に恵まれて、順風満帆に見えるサリーだが、その勤務先の連続性がそのままプロとしての成功に直結するわけではない。一人前の教員として対処すべきことの多さ、大きさは、なじんだ場所においてなお——むしろ、なじんだ場所にいるからこそ、いっそう——厳しく身に迫る。

本編でのサリー先生の奮闘は、外伝での学生サリーの活躍を経由して見直すと、着任してからこそがサリーの本当の勝負であり、本当の成長、と見えてくる。真の教員養成は、着任後。教育実習は、その出発点でしかない。終生学び続ける教員であることの必要性を、そして、その努力の尊さと大変さを、作者は校長の視点から、激励とユーモアを交えつつ訴えるのである。

正規の教員となったサリーは、教員という職業の要請を満たすため、個性と適応の両立を果たすべく、終わりなき戦いに挑み続ける。

ひとつには、気質。元ヒッピーで反・管理を旨とし、「解放された自由奔放な女性」だったはずのサリーが、小学生を教えることからくる職業病で、いつしか「仕切り屋」に変容。第1巻では、夫の職場のパーティの席で、つい習慣で、ノートを出し「オードブルがほしい人は手を挙げて！」(176)と、注文をとりまとめてしまう。それでも、さすがに「おうちに帰る前に、みんなトイレに行ったかな？」(176)と確認するのはやめておく。また、はだしで踊る体育の時間に、児童の靴下が混乱しないよう、脱いだら上履きの右・左に片方ずつ入れさせておくなど、豊富なノウハウで管理に熟達するのである。

もうひとつには、体型。中年太りでゆるみゆくボディラインの抑制がなかなかうまくいかないのは、肉に形を借りて、心を枠に収める困難を象徴している。英国の職員室では、教職員が経費を出し合って缶入りビスケットを常備する習慣がある。サリーが缶の中のカスタード・クリーム・ビスケット<sup>6</sup>に手を出そうかどうか逡巡するシーンは、もはやシリーズのお約束。お菓子の誘惑と闘う、永遠のダイエット。

じつはこれにも元ネタがあり、サリーが「ミス・ノップズ」から結婚で「ミセス・プリングル」になったことで、この肥満問題に見当のついた英国人読者も少なくないはずである。なにしろ「ミセス・プリングル」は、イギリス学校小説の大御所、ミス・リード(Miss Read, 本名 Dora Jessie Saint, 1913-2012)の「フェアエーカー」シリーズ (“Fairacre” novels, 1955-96)でおなじみ、巨体の学校掃除婦。その名をタイトルにした1冊も出ているくらいの、強烈キャラである。<sup>7</sup>

あの難物ミセス・プリングルに比べたら、こちらのミセス・プリングルなど、かわいいもの。そうした印象を醸し、サリーに注がれる読者の視線を和らげ、応援する側に回そう、という作者

の機略が、ここでも効いている。

一方で作者は、第13巻で、教育実習の経験を活かせないまま初任校でつまづき、教員としても人間としても、ものにならない人物を、冷徹な筆致で描出する。作者の初任校の同僚ペニー(Penny)は魅惑的な美人ながら、とんだ二股女で、シェフィールドをもてあそんだ挙句に、腐れ縁の上流男と結婚・離婚し、シングルマザーのまま二流教員に終わる。

人を見る目のなかった作者自身の、若気の至り、傷の痛み、後味の苦さとともに、読者に迫ってくるのは、教員が真の教員に成るための道の厳しさである。サリーとペニーは、名前の音が揃って韻を踏むだけに、教員人生の光と影の対照が、いっそう際立つ。

まずは真率で誠実な人間であること——奇抜な外見にも惑わされず、ベラの見込んだサリーのなによりの美点が、一生にわたる教員養成の柱として輝き出す。

そして、そのように教員が学び続け、育ち続けるために必要なのは、それを見守り、支える、校長／管理職の目であることを、シェフィールドは強い責任感とともに、上司の校長としても、作家としても、実演してみせているのである。

### 3. トム・ドワイヤー——元プロ・サッカー選手の男性教員

#### 3-1 初任者としての姿

フィンの「デールズ」シリーズでは、サリーに負けない個性派、元プロ・サッカー選手で教員志望の若者、トム・ドワイヤー(Tom Dwyer)が登場する。

ヨークシャーのデールズ(溪谷)地方に展開するこの連作小説は、教員時代から地域の催しやテレビ番組での爆笑トークで名を馳せていたフィンが、作家に転じて健筆をふるう、押しも押されぬ一大ベストセラーで、視学官(フィン本人)を主人公とする第1シリーズ(5部作、1998-2007)、小学校長エリザベスを主人公とする第2シリーズ(5部作、2011-2016)、そして初任者トムを主人公とする第3シリーズ(3部作、2018-2021)から成る。

第2シリーズは「小さな村の学校」シリーズ(*The Little Village School series*)、第3シリーズは「谷のてっぺん」シリーズ(*The Top of the Dale series*)。前者はトムの実習校で、後者はトムの赴任校。トムの教員養成のふたつの舞台を呼称とする、この両シリーズは、トムの教員としての成長を、ひとつの主要なテーマとしているのである。

サリーとの大きな共通点は、目立つ個性が当初は周囲から浮くが、めざましい働きぶりや人柄の良さで、ほどなく現場に認められ、受け入れられるところである。ただしトムの場合、本人は有名人、赴任先は最僻地。教員の個性と現場の地域性のギャップはさらに大きく、サリーの場合よりもハードルが相当に上がっている。それだけに物語はいっそうドラマチックになり、トムの成功はますますの快挙となる。

トムはイングランドのプロ・サッカーの2部リーグ所属チーム、クレイトン・ユナイテッドの元キャプテン。しかも、とびきりの美男子で、鍛え上げた肉体美。下積み時代には副業に、下着のモデルもしていたほど。ふだんは控え目で謙虚な性格ながら、人目を引くオーラの持ち主で、スター性・カリスマ性は隠しようもない。

それにひきかえ、赴任地のライジングデール(Risingdale)は「谷のてっぺん」、デールズ地方の最奥地。人里離れた、辺鄙きわまる小村で、隠れ里もいいところ。

このちぐはぐなめぐり合わせは、サッチャーの教育改革で学校統廃合と人員削減が断行され、全国的に新任教員の就職口が激減したことの煽りである。

ド田舎ということは、ただでさえ閉鎖的な農村社会に、輪をかけて排他的ということである。事実、デールズ地方でよく言う「よそもん(off-comed-un)」という方言は、この寒村では、他所にも増して強い響きを伴う。

そんなハンディを背負いつつも、教員デビューに際し、トムはその抵抗をみごとに克服する。村人の目に映るトム像が「よそもん」から「地域のスター」に塗り替えられていくさまを、フィンは劇的に列挙する。

第3シリーズ1冊目の冒頭、採用面接で初めて村に来たトムの運転するスポーツカーが、村の有力者の娘が乗る馬と、悪名高い急カーブで衝突しそうになる場面は、新来者と村民の関係の初期状態を象徴している。だが、一方的に罵りまくる娘に対し、トムはあくまで礼儀を守る。この件が村の噂の種になっても、トムは平謝りを貫く。相手に一切責任転嫁しない、トムの潔い姿に、当の娘の父までが感心し、以後この有力者が、逆にトムに信頼を寄せるようになる。

村のパブでは、同席していた学校掃除夫が、地方領主の高慢なドラ息子に侮辱され、トムは見過ごせずには相手を殴り倒す。現役時代のピッチでの喧嘩っ早さと、アイルランド系<sup>8</sup>の熱い血が、つい出てしまったことを反省するトム。しかし、だれもが忍従していた村の嫌われ者に天誅を下したことで、溜飲を下げた村人たちは大喜び。トムは一気に、村の人気者に格上げされる。

教室では、担任としてのクラス運営に、かつてキャプテンとしてチームを統括していた経験が生きる。全体へのフェアな目配り、頼もしいリーダーシップ、瞬発的な判断力、冷静沈着な危機管理能力。児童の困りごとをすかさず拾い上げて親身にケアする問題解決能力は、父母たちも認めて感謝するところとなる。

課外活動では、サッチャー時代の知育偏重で実技系科目が軽視される中、体育教育の拡充に自分の強みを生かしたい、とサッカー指導を希望するも、場所がなくて困り、そこらへんの空き地とおぼしきところで、子どもたちを練習させる。そこに現れた地主の農夫は、クレームを言いかけてトムの正体に気づく。この僻村の、さらに村はずれに住む、村の噂にすら疎い、この世捨て人が、じつはトムの試合を毎週見に行っていた大ファン。「ぶったまげたわ！トム・ドワイヤーでねえか。おめえさま、とんでもなく、うまかっただよ。とっくにプレミアリーグに行ったもんだと、思うとったに」(90)と驚愕、歓喜。そして、子どもたちのために、自分の土地を練習場に整備して提供する、と申し出てくれるのだ。

また、村一番のドケチな老人も、トムには気前良くなってしまいうほど、人好きのする性格。上司の校長も「君なら大丈夫とってたよ」(94)と吐露する、天性の教員。くだんの娘も、結局は恋に落ちずにはいられない、魅力的な好男子。なにより、教育の理論と実践を熱心に学び続け、地域に根差した教育の将来像を構想する、教育者としてのスケールの大きさは、ひよんな偶然から、地元選出の国会議員の目に留まる。この議員が教育大臣に就任したことで、トムの教育観は国の行政にも通る道が開ける。

このようにトムは、教員の個性が地域で輝く結果を、幸運にも大いに恵まれたにせよ、自力でつかんでいく。順風満帆かと見える初年度。しかし同時に、その成果を一挙に無に帰しかねない、大きな試練が立ちはだかる。それは、教員個人の個性や能力だけでは歯の立ちようもない、社会事情と国家政策である。赴任早々、トムの勤務校は、廃校の危機に直面するのだ。

世の最果てにある学校ゆえ、同僚の教師たちはみな訳ありの人物で、それぞれに世間から身を隠したい事情を抱えている。だからこそ、おたがいへの思いやりは深く、抜群のチームワーク。各自が教員としても豊かな持ち味を備え、校長は「州で一番の教師陣」と胸を張る。このスタッフにも尊敬と愛着を抱いたトムは、定住する覚悟を決め、この土地に家を買う。その矢先に持ち

上がった統廃合計画は、むしろトムにとってこそ最悪のタイミングで、トムは幸運どころか、最も不運とすらいえる。しかも閉校の場合の選択肢が、同僚たちの場合は早期退職か、斡旋先の学校への転勤か、に限られるのに対し、トムの場合はずっとややこしく、かつての実習校の求人に応募するかどうか、という難しい選択がからんでくるのである。

### 3-2 教育実習とのギャップ

トムとサリーの最大の違いは、トムの実習校と勤務校が、真逆の様相だったことである。州でトップの旗艦校と、廃校寸前の僻地校。

教育実習の真価は、プロとしての勤務で、初めてわかる。実習先と同じ学校ですら、たゆみない努力と忍耐が求められていたサリー。ましてトムの出た現場は、教育実習の経験をそのまま生かせないどころか、いかに実習どおりにはいかないか、そこをどうできるか、という、応用問題だらけ、難易度最高の、天下の嶮（けん）——文字通り「谷のてっぺん」である。

トムの初年度最大の課題は、そうした教育実習とのギャップを埋めていくことにあったのだが、現任校の廃校の可能性が浮上し、実習校の校長がトムを呼び戻そうと盛んに勧誘してくることで、そもそも今の現場にとどまるべきか、とどまらざるべきか、という判断を迫られ、当初の課題はさらに複雑化する。情勢がきわめて不安定で決め手を欠く中、答えはなかなか出ない。勤務期間が長くなるにつれ、児童・教職員との絆も深まり、ますます去りがたくもなるが、一方で、この学校自体が消滅する可能性も消え去らない。

トムの迷いは、ふたつの学校それぞれへの義理、という社会的な配慮も当然からむが、結局は、自分はどのような教育を行いたいのか、どのような教員になりたいのか、という本質的な問題に帰着する。第3シリーズの3冊にわたり終始続くトムの懊悩は、英国の教育観・教員観の根本を、読者にも問いかけ、考えさせる。この仕掛けは、当時の教育政策が教育の意味と教員の評価をどちらにもテストの点数に一元化しようとしていたことへの、痛烈な批判の機能も果たしている。

そして、トム本人の教員志望の原点にあったのが、この実習校だった。第2シリーズの2冊目、バートン・イン・ザ・デール(Barton-in-the-Dale)小学校のエリザベス校長は、問題児の対応に手を焼くが、この児童がサッカーにだけは興味を示すことに目をつけ、地域のプロ・チーム、クレイトン・ユナイテッドのキャプテンに訪問を依頼。ある日いきなり学校に現れて、児童たちと交流するトム。輝くばかりにかっこよくて、気さくで、すてきな大スターに夢見心地の子どもたち。「学校の勉強は大切だよ」(262)と語る飾らない姿に、問題児も心打たれ、生まれ変わる。

この訪問で人生が変わったのは、じつはトム自身だった。両親を亡くして不良少年だったトムは、親代わりを務めてくれた叔母に「子どもの時、あの校長先生みたいな先生がいたら、もうちょっと読書が好きになってたかも」(268)と漏らす。これはお追従や冗談でなく、本気の教員志望の芽生えだった。その後、試合の怪我で引退したトムは教員養成大学に入学、今度は教育実習生としてエリザベスの学校を再訪。設備・教職員・児童・教育内容とも、州で最高レベルの学校で、実習生として最高の評価を獲得。エリザベスの折り紙付きで、教員の道を歩み出したのだった。

理想の教育を体験してしまっただけに、それへのこだわりを捨てきれないトムの悩みには、英国の伝統的な教育の良さを手放すことを強制された、1970-80年代のイギリスの、すべての教員の悩みが重なってもいる。トムはどこに突破口を見出すか。そこには、国家が向かうべき方向の示唆が潜んでいる。トムの教員養成の物語は、トムひとりのみならず、時下のイギリス全土における、転換期の教員養成の縮図として語られているのである。



### 3-3 実習校≠勤務校：現実での雄飛へ

実習校と勤務校が、いかに異なる現場だったにせよ、トムの初年度の仕事を支えていたのは、やはり教育実習での学びであった。第3シリーズの全編にわたる実習校への言及の多さは、トムが目下の課題を解決する上で、いつも教育実習の体験を参照点にしていたことを示している。それは、実習経験の意味を再検証し、再発見し、深化し、拡大していくプロセスでもあった。別の学校だからこそ見えてくる、そして身につく、学んだことの本質。実習校と勤務校が違うことのメリットを、作者は徐々にあぶり出してみせる。

けたはずれに反抗的な問題児に対し、トムはまず、上から抑えつけず、条件を出して取引することで、授業中の態度を改めさせる。次に、この児童に美術の才能を見出し、退職教員に贈る水彩画の制作を委託する。さらに、学校代表で州のコンテストに出品させる。最優秀賞を獲得し、元・悪童は芸術家の道を歩き出す。こうしたトムの機転の核には、どの子にも公平であること、子どもの良さを引き出して自己有用感を持たせること、多彩なアイデアで継続的に後押しすることなどの、実習で学んだ基本原則があった。赴任校での格段にハードな事例は、その適用範囲を拡張する、格好の鍛錬になっている。

また、トムは中学受験の引率先で、実習生時代の教え子と再会し、現任校の生徒と引き合わせ、ふたりはともに合格して親友となる。実習校で培った人脈が、赴任校で生きるのだ。じつは、実習先の村バートンと赴任先の村ライジングデールは、大昔に羊盗みの件で絶縁しており、トムは今後、このふたつの村を仲直りさせそうな気配。「地域に溶け込む」どころか「地域の救世主」となる可能性が、暗示される。これも、実習校と赴任校が別だからこそその縁であり、手柄である。

勤務校に合った指導に専心することで、トムは担任としてきっちり結果を出す。農家の子女である児童たちの個性を把握し、大人顔負けの豊かな専門知識でこの地に発揮している真価を尊重した上で、潜在能力を存分に引き出す。グラマー・スクール（大学進学型中学）に入学するための11歳児対象全国統一進路適性試験、イレブン・プラスに挑戦する児童が激増し、しかも受験者は全員合格。トムのクラスは合格率100%という、近隣の学校にも類を見ない快挙を成し遂げる。

ここに至り、シリーズ名“The Top of the Dale”は「峡谷地方の山頂」、「ド田舎の極致」から「谷の頂点」、「地域のトップ」の意に転じる。地域の個性に合わせてこそ実績を挙げたトムは、みずからの進むべき教員の道として、「地域に即すことで最高の教育を行う」という、ひとつの答えにたどりついている。そこには現場優先の、イギリスの伝統的な経験主義・実践主義が実を結んでもいる。しかも点数至上のサッチャーですら、ぐうの音も出ない成果なのである。

迷いを振り切り、自分の教育観を見定めたトムは、なんと校長代行に大抜擢される。現校長の退職予定に伴い、学校の下見に来た後任者は、前任者の学校運営方針を全否定。これに反発した教職員一同は全員が退職を希望。現校長と学校理事長の訴えで、州教育委員会はこの人事を急遽撤回。後任決定までの代行に、学校の実情を理解したリーダーシップある人材として、関係者全員の推挙でトムの就任が決定。ここに、実習校と勤務校の最大の違いがある。指導される立場から、指導する立場へ。トムの下剋上は、両者の連続性が断たれていたからこそ実現する。サリーのように「元・実習生」という立場の学校では、やはりけじめがつけにくい。

校長が担任も兼ねることの多いイギリスでは、もともと校長就任は30代が普通だが、代行にしても20代、しかも初任者が次年度にいきなり、というのは、さすがに異例である。しかしこれは夢物語ではない。変革の時代にあっては、教育の未来を、その時にも現役である今の若い世代が自分事としてとらえ、新鮮な感性と大胆な発想で長期的な展望から、目の前の学校をリードして行ってほしい。そのためには、能力さえあるなら校長は初任者であってもかまわない。むしろ

初任者のうちから校長の目で学校を見てほしい、という、元視学官である作者フィンの、実感に基づいた本気の主張なのだ。<sup>9</sup>

その本気度は、国会議員・校長・学校理事長と、旧世代の要人を3人もトムの支援者に配する作者の意匠に現れている。とくに学校理事長である地方領主は、この地で最大の権力者であり、学校の危機打開に乗り出す際、トムの声を判断の決め手とする。若い世代が活躍するためには、彼らを引き立てる大人の見識の高さこそが必要とされることを、作者は強く印象づけている。<sup>10</sup>

トムを応援する大人たちが、このお偉方も同僚の教職員も、皆、かなりの年配であることは、トムの若さと個性が上の世代に受け入れられ、従来の方式とも調和していることを示す。事実、トムが校長代行として適任と判断された最大の理由は、現校長の路線を継承する姿勢にあった。

現校長は教員の個性を最大限に尊重し、自由に発揮させて成果を生むマネジメントで、地域の人々から絶大な尊敬を集め、女王からも OBE 勲章を授与される人物。トムは、自身と児童の関係はフレンドリーでリベラルであるものの、他のスタッフの旧来の方式・信念にも敬意を持ち、評価している。それは、地域の特性を理解していてこそその前向きな構えであって、後任校長候補が振りかざした、教員への干渉・管理を徹底する全国統一型の、進行中の政策とは対極にある。

顕著な個性を持つトムが伝統の継承者でもあることを押し出すべく、フィンはシェフィールドと同様に、やはりマザーグースのイメージを援用することで、歴史的文化への親和性を強調し、違和感を軽減している。次のわらべ唄「笛吹きの子トム」は、まさに新任教員トムのテーマソングであり、作中を貫く BGM なのだ。

Tom he was a piper's son,  
He learned to play when he was young,  
But all the tunes that he could paly  
Was 'Over the hills and far away'.  
    Over the hills and a great way off,  
    The wind shall blow my top-knot off.

Tom with his pipe made such a noise,  
That he pleased both the girls and boys;  
They all danced while he did play  
'Over the hills and far away'.  
    Over the hills and a great way off,  
    The wind shall blow my top-knot off.

Tom with his pipe did play with such skill  
That those who heard him could never keep still;  
Whenever he played they began for to dance,  
Even pigs on their hind legs would after him prance.  
    Over the hills and a great way off,  
    The wind shall blow my top-knot off.

As Dolly was milking her cow one day,

Tom took out his pipe and began to play;  
So Doll and the cow danced 'The Cheshire Round',  
Till the pail was broken and the milk ran on the ground.

Over the hills and a great way off,  
The wind shall blow my top-knot off.

He met old Dame Trot with a basket of eggs,  
He used his pipe and she used her legs;  
She danced about till the eggs were all broke,  
She began for to fret, but he laughed at the joke.

Over the hills and a great way off,  
The wind shall blow my top-knot off.

Tom saw a cross fellow was beating an ass,  
Heavy laden with pots, pans, dishes, and glass;  
He took out his pipe and he played them a tune,  
And the poor donkey's load was lightened full soon.

Over the hills and a great way off,  
The wind shall blow my top-knot off.

(Opie 168-169)

トムはふえふきのむすこ  
こどものころにふえをならった  
だけどふけるのはたったのひとつ  
“おかをこえてはるかかなたへ”  
おかをこえてはるかかなたへ  
わたしのリボンをかぜがとばす

トムがにぎやかにふえをふくので  
おともおんなもおおよろこびさ  
あしをとめてみみをすます  
“おかをこえてはるかかなたへ”

トムはほんとにふえがじょうずだ  
きいたらじっとしてられない  
みんなそろっておどりはじめる  
ぶたどもでさえあとあしではねまわる

あるひのはなしドリーがちちをしぼっていると  
ふえをてにとりトムがふきだす  
ドリーはめうしと “チェシャーおどり”

バケツはこわれミルクはすっかりじめんにこぼれた

たまごのかごもつトロットばあさん  
トムがふえふきやばあさんおどる  
おどりまくってたまごはこなごな  
ばあさんぶつぶつトムはげらげら

ろばをぶってるふきげんおとこ  
コップにさらにあさなべふかなべ  
ろばはおもににあえいでいたが  
ふえのおかげでとたんにせなかがかかるくなる

(谷川 142-145) <sup>11</sup>

レパトリーは「たったのひとつ」でも「ほんとにふえがじょうず」な笛吹きトムは、一芸に秀でた個性の持ち主として、サッカーの名選手トムに重なる。笛吹きトムが村のあちこちで騒ぎを起こす様子は、新来のトム先生が村を席捲する光景そのものである。

この童謡は伝説「ハメルンの笛吹き男」を下敷きにしている、というのが定説であり(渡辺 1986, 164-165)、その元ネタに照らすと、トム先生バージョンは幾重にもひねりの効いたパロディに見えてくる。

まず、「およろこび」する“girls and boys”は、学校用語だと女子・男子の“pupils/students (児童/生徒)”の意。笛吹き男の魔笛に翻弄される子どもたちは、トム先生の抜群の指導力に、夢中になってついていく学童たちになる。“They all danced while he did play”は「笛吹けど踊らず」どころか「笛吹くかぎり、みな踊る」、クラスが一体となった授業風景である。

笛吹き男は子どもたちを山奥に連れ去るが、トム先生は反対に、もともと山奥にいる子どもたちを、広い世の中に連れ出す。「おかをこえてはるかかなたへ」子どもたちを行方不明にするのではなく、「おかをこえてはるかかなたへ」子どもたちの活躍の舞台を広げてあげるのだ。

そのように“over the hills and far away”<sup>12</sup>というフレーズは、イディオムの“go far (出世する、大物になる)”を連想させると同時に、フィンの第1シリーズ2冊目の表題 *Over Hill and Dale* (『丘越え谷越え』)をも想起させる。トム先生も、華やかなサッカー場からデールズ地方へ、「おかをこえてはるかかなたへ」引っこんだことで、逆に自分の本当の天職の場にめぐりあい、当地の学校を背負って立つ、大出世を遂げるのである。<sup>13</sup>

読者の知識と教養に訴えて物語を楽しませることで、無理なく、その教育観・教員観への共感を呼ぶフィンの技巧は、最終巻の表題 *A Class Act* にも発揮されている。<sup>14</sup>

口語的なイディオムとして、一般的には、“a class act”は“an act of the first class”すなわち「第一級の行為」、「とびきりの出来」の意。直接的には、幕切れのトムの校長代行就任を「離れ技」と賞賛し、その着地に拍手を送る書題である。それは、プロ・サッカー選手として美技を決めてきたトムの、ハット・トリックの教員版、とも言えよう。<sup>15</sup>

しかしトムの場合、それは“an act in a class”つまり「学級での行い」、「教室での実践」でもある。派手で大きなファインプレーひとつに、教員としてのトムの見せ場があるわけではない。地味で小さなフェアプレーひとつひとつを、日々積み重ね、児童の信頼と親愛を得てきたことこそ、トムの真価があるのであって、物語はトムのそうした仕事ぶりを、丁寧に、つぶさに、追

っているのだ。題名の冠詞が“the”ではなく“a”であることの意味は、そこにある。1回きりの大技ではなく、これからも教員であるかぎり積み重ね続けていく、ひとつひとつのプレー。まずは目を引く語句を配しながらも、作者は平生の所作に、読者の視線を誘っている。今後トムは、そうした働き方によってこそ、真のスター・プレーヤーになるはずなのである。

シリーズの結末でフィンが提示する、きわめつけの標語は、地方領主の家に代々伝わるラテン語の家訓“*Docendo discimus*” (381)。この英訳は“*We learn by teaching*” (381)。トムはこれにうなずき、クラスの子たちのおかげで自分もいっばしの「羊オタク」になった、と冗談を飛ばし、居合わせたお歴々も微笑んで同意する。

「教えることで学ぶ」——それは教員養成の要諦である。逆に言えば、教えていて学ばない、などということは許されない。教えるからには、学ばなければいけない。教員とは、常に学び続けるべき職業である。教員養成は、学生時代だけでなく、一生続く事業なのだ。たとえどんなに成功したとしても、教育実習だけで教員の「完成形」になるはずもない。実習で高い評価を得たトムですら、例外ではないのである。

トムの校長代行は、いわば校長実習である。この管理職養成が、もともとの初任者養成と、わずか1年のズレで、ほぼ重なる形になるのも、やはり「初任者から校長の視点を」という作者の願いの、切なる表出といえる。

ここへきて、トムの実習校と勤務校の様相は、意外にもぴったり重なり合う。そもそもエリザベスは、都会の小学校で校長を5年務め上げた後、家庭の事情で村の小学校へ移り、統廃合の危機にあった学校を、見違えるような模範校に変貌させた名校長だった。「小さい村の学校」を救う校長になるための教育実習は、トムにとって、じつはバートン小学校で、絶好のお手本のもとですでに始まっていたのであり、ライジングデール小学校での今は、その続きだったのである。

地域の個性、児童の個性、教員の個性を重んじ、磨き続けることを、初任者と管理職の両方の視点から総合的にめざすトムの針路は、その3つの個性を、全国共通カリキュラムと全国統一学力試験の導入により、トップダウンで一方向的に全部なぎ倒そうとしていた、当時の政府に対する叛旗となる。それは現在、AI時代の教員養成においても、人間としての教員が個性を伸長し発揮することの意味に、貴重な示唆を与えているのである。

#### 4. 結

ヨークシャー学校小説における教員養成の物語に見られる最大の特徴は、教員の個性が軽視されつつある時代への強烈な危機感が、全編ににじんでいることである。シェフィールドとフィンがどちらも、個性的すぎるくらい個性的な教員を登場人物に据えている意図は、そこにある。

サッチャー以前の伝統的な英国式教育では、授業の内容も進度も教科書も、すべて教員の裁量に任されており、児童生徒の個別のニーズに応じて、また地域の実態に合わせて、柔軟な実践が行われていた。そうした自由度の高い教育を行う教師に必要とされるのは、個々の子どもの個性を受けとめ、見きわめるための優れたコミュニケーション能力であり、授業力は、それと同等以上の人間力があって初めて、生きてくる。人間力を培うのは一生にわたる仕事であり、それゆえ教員養成とは、キャリアの初めから最後まで、絶えず学び続け、育ち続けて、豊かな個性をみずから持ち、児童生徒の範となることをめざす大事業であった。サリーとトムは、そうした教員として生きていく志を抱く人間の、絶好の実例となっている。

そのような従来 of 理想の教師像に逆らって、教育・教員・児童生徒をみな規格化・画一化しよ

うとする成果主義の波を、どう払いのけるか。ふたりの作家が採った戦略は、教員の個性が認められる世界、その世界を支えている要素、その世界を可能とする条件を、作品空間に構築し定着し、文学という形で、その価値と意味を読者に体験し実感させる方法である。こういう世界を残そう、あるいは、実現しよう、という思いは、物語を介してこそ、具体化し、心に響く。論より証拠。芸術が人を動かす力は、理性と感性の両方に働きかけて、現実の政治力に転化しうるのだ。

両シリーズには、いくつか、共通して窺われる教育観がある。激変する時代の先行きを見通して動くためには、新しい時代の息吹を最も敏感に察知しているはずの下世代、すなわち若い教員、教育実習生、児童生徒にこそ、教育現場は学ぶべきであること。そのように、教育は常に、アップデートしていくべきものであること。その一方で、従来の伝統・慣習・実績への深い理解なくしては、新しい要素を取りこむ場合に、手のつけどころや落としどころが本当にはわかるはずもなく、下世代は上の世代の経験した過去の経緯を十分に踏まえるべきであること。と同時に、上の世代は下世代を、自分たちには理解できないような要素や個性があっても——むしろ、あるからこそ——支援すべきであること。こうした理念に基づく教員養成の実現が、容易ではなくても、決して不可能ではないことを、サリーとトムの歩んできた道は実証している。

未来を創る教育を担うためには、若い世代の力をこそ、学校運営に生かしていくべきであること。教員の個性が認められないようでは、児童生徒の個性など伸ばせるはずもないこと。イギリスの学校小説が帰着するこの2点は、現在の日本の教員養成・教員研修にも、貴重な訓戒となる。ICT教育がコロナ禍で一気に加速し、学校現場をテクノロジー面でリードするエバンジェリストの多くが若手教員である今、新しい教育を提案し、率いていくのが若い世代であることは、時代の要請でもある。また、発明の盛んな国、産業革命を起こした国、何でも世界一を喜ぶギネスブックの国、奇人変人万歳の国であるイギリスでは、歴史的にも、個性はまさに国力であったが、「ものづくり」の国、日本でも、同様のことが言えるはずなのだ。

教育は、常に流動する時代の中にある。その不易の課題に因應するため、教員は、生涯をかけて自分を育てていく。したがって教育実習は、教員の練習ではない。それはもう、教員の道の本番の始まりなのだ。サリーとトムの教育実習は、そこから広がる物語の、それぞれの豊かさによって、教育実習という体験の魅力と可能性を伝えるとともに、そのかけがえのなさへの理解と協力を、世に訴えているのである。

#### 注

1. 日本の教育現場なら、おそらく校長の「指導」が入りそうな服装である。
2. 校長のジャックは由緒正しい高級紙『タイムズ(*The Times*)』、若手教員のトムは娯楽中心の大衆紙『デイリー・メール(*The Daily Mail*)』を読む。教員の多様性が尊重されている、英国らしい場面である。
3. 第13巻は1969年度、第14巻は1976年度の物語で、この2冊はジャックのラグリー小学校長就任以前の、初任校・前任校での教員生活を描いている。
4. ベラは支持政党やファッション感覚ではサリーと対立するものの、女性の活躍の場を希求する新しさでは、サリーと同じ方向にある。そうした本質的な部分での共感がふたりの間に存在することも見逃せない。
5. スピア(14-15)の挿絵は、ラグリー村の教会での、この物語の挿絵としても、そのまま通用する。
6. カスタード・クリームは、マクビティのダイジェスティブと並ぶ、英国のビスケットの王道(ペイン 81)。「先生方のお気に入り」のお茶菓子として、学校小説にはガリバルディ(レーズン・パイ)もよく登場する。
7. ミセス・プリングルのキャラの意味合いについては、武田(2019)を参照のこと。
8. トムの人物造型には、同じくアイルランド系の作者本人の性格や願望や背景が投影されている。

9. 日本でも、さいたま市などの地方自治体では、管理職試験の受験資格年齢を近年大幅に引き下げている。
10. とくに変革の甚だしいサッチャー時代、現実の教育現場ではこの理想と逆の行為が横行しがちだったことを、ヨークシャー学校小説のもうひとりの作家、アンディ・シード(Andy Seed)は作中で暴いている。3部作の第1巻『すべての教師、大なるも小なるも(*All Teachers Great and Small*)』(2011)でシードは、自分の教員時代の経験に基づき、授業力・企画力・コミュニケーション力に長けた有能で意欲的な初任者が、旧弊で無能な校長に妬まれて足を引っぱられ、モラル・ハラスメントを受けて苦しみ続ける姿を描いている。
11. 谷川の訳では、2連以降のリフレインは省略されている。
12. このフレーズは、この童謡をもとにした多数の作品のバリエーションを示す標識となっている。アメリカでは1920年にパラマウント映画『丘を越えて(*Over the Hills*)』が制作されて好評を博し、さらに、この映画にヒントを得て、日本では1931(昭和6)年に歌謡曲「丘を越えて」(作詞・島田芳文、作曲・古賀政男、歌手・藤山一郎、発売・コロムビア・レコード)が空前の大ヒットとなった(渡辺1986, 165-166)。またイギリスでは1973年にブリティッシュ・ロックの大御所、レッド・ツェッペリン(Led Zeppelin)が“*Over the Hills and Far Away*”をリリースし、以後も多くのアーティストがカバー。日本映画でも1951年に『あの丘を越えて』(主演・美空ひばり)、2008年に『丘を越えて』(主演・西田敏行)が制作されている。
13. この伝承童謡には、次の「泥棒トム」バージョンもある。

Tom, Tom, the piper's son  
 Stole a pig and away he run;  
 The pig was eat  
 And Tom was beat,  
 And Tom went howling down the street.

(和田 69)

トムトム 笛吹きの子  
 ぶたを盗んで のっこのこ  
 ぶたは食べられ  
 トムはなぐられ  
 しくしく泣いてるトムあわれ

(和田 68)

この1連だけを独立した唄とするこのバージョンでは“a piper”ではなく“the piper”と定冠詞が使われており、これは「例の笛吹き男」、すなわち「ハメルンの笛吹き男」をさすと思われる。子どもたちを盗んだ「例の悪者」の息子は、やっぱり悪者で泥棒、として、妙なる笛の音ではなく泣き声を出させながら、群れではなくひとりで歩かせ、過去の恨みを息子の代で晴らす復讐の唄になっている。この1連の後に、本文中の唄の最初の1連のみを加えた2連バージョン(河野102-105)もあり、そこでは各連の一行目が“the piper”と定冠詞で揃えられているとともに、以降の連がすべてカットされて、「幼時から習ったのに1曲しか覚えられなかった」と、父の技能が継承されない結末になっており、これも社会悪を根絶するリベンジ版といえる。また、スコットランドの古謡にも、以下の通り、類似の唄がある。

My plaid awa, my plaid awa,  
 And ore the hill and far awa,

And far awa to Norrowa,  
My plaid shall not be blown awa...

(渡辺 1978, 40)

わたしの肩掛け飛ばされる、飛ばされる、  
丘を越えて はるか遠くへ、  
遠くノルウェイの国までも、  
そんな遠くへは わたしの肩掛け飛ばすまい。

(渡辺 1986, 165)

現在のロング・バージョンがこれへの返歌とすると、リフレインは「いやいや、トムなら飛ばしてみせる」と、トムの技量と個性の卓越ぶりをいつそう誇るものになる。 (“the wind” には「管楽器」の意味がある)

14. 第3シリーズ2冊目の表題 *Tales Out of School* も、「学校から出た話」、「学校の話」と見えて、じつは「さらされた恥」、「外に漏れた秘密」の意の熟語であり、かつこいはいはずのトムが女性たちに振られ続けるなど、手痛い失敗や恥を耐え忍ぶ物語である。この、楽ではなかった道を経て、3冊目の *A Class Act* が一層引き立つ運びとなっている。
15. 「1 試合で3点獲得」という原義に沿えば、「校長代行就任・理想の女性との結婚・理想の地でのマイホーム購入」という「仕事・愛・家」の3点セットでの成功が、これに当たる。ワーク・ライフ・バランスのいいトムの総合的な達成は、自分の身をまるごと地域に捧げる覚悟あつての功業といえる。

#### 参考文献

- Miss Read. *Mrs Pringle*. London: Michael Joseph, 1989.
- Opie, Iona and Peter, eds. *The Puffin Book of Nursery Rhymes*. Harmondsworth: Puffin, 1963.
- Phinn, Gervase. *The Other Side of the Dale*. London: Michael Joseph, 1998; London: Penguin Books, 2010.
- . *Over Hill and Dale*. London: Michael Joseph, 2000; London: Penguin Books, 2010.
- . *Head Over Heels in the Dales*. London: Michael Joseph, 2002; London: Penguin Books, 2010.
- . *Up and Down in the Dales*. London: Michael Joseph, 2004; London: Penguin Books, 2010.
- . *The Heart of the Dales*. London: Michael Joseph, 2007; London: Penguin Books, 2010.
- . *The Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2011.
- . *Trouble at the Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2012.
- . *The School Inspector Calls!* London: Hodder & Stoughton, 2013.
- . *A Lesson in Love*. London: Hodder & Stoughton, 2015.
- . *Secrets at the Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2016.
- . *The School at the Top of the Dale*. London: Hodder & Stoughton, 2018.
- . *Tales Out of School*. London: Hodder & Stoughton, 2020.
- . *A Class Act*. London: Hodder & Stoughton, 2021.
- Seed, Andy. *All Teachers Great and Small: A Memoir of Lessons and Life in the Yorkshire Dales*. London: Headline, 2011.
- Sheffield, Jack. *Teacher, Teacher!: The Alternative School Logbook 1977-78*. London: Central



- Publishing Services, 2004; London: Corgi, 2007.
- . *Mister Teacher: The Alternative School Logbook 1978-79*. London: Corgi, 2008.
- . *Dear Teacher: The Alternative School Logbook 1979-80*. London: Bantam, 2009.
- . *Village Teacher: The Alternative School Logbook 1980-81*. London: Bantam, 2010.
- . *Please Sir!: The Alternative School Logbook 1981-82*. London: Bantam, 2011.
- . *Educating Jack: The Alternative School Logbook 1982-83*. London: Bantam, 2012.
- . *School's Out!: The Alternative School Logbook 1983-84*. London: Bantam, 2013.
- . *Silent Night: The Alternative School Logbook 1984-85*. London: Bantam, 2013.
- . *Star Teacher: The Alternative School Logbook 1985-86*. London: Bantam, 2015.
- . *Happiest Days: The Alternative School Logbook 1986-87*. London: Corgi, 2017.
- . *Starting Over: A Ragley Story 1952-53*. London: Bantam, 2018.
- . *Changing Times: A Ragley Story 1963-64*. London: Bantam, 2019.
- . *Back to School: A Teacher Series Novel 1969-70*. London: Corgi, 2020.
- . *School Days: A Teacher Series Novel 1976-77*. London: Corgi, 2021.
- 河野一郎・編訳。『対訳 英米童謡集』。岩波文庫。東京：岩波書店、1998。
- スピア、ピーター。『マザーグース・ライブラリー3 市場へ！いきましょう！』。わしづ なつえ・訳。東京：瑞雲舎、1998。
- 武田ちあき。「イギリス教育小説における学校掃除婦の表象——その文化的意味と政治的機能——」。『埼玉大学紀要（教育学部）人文・社会科学』第68巻、第1号、2019。271-284。
- 谷川俊太郎・訳。鷺津名都江・編。『よりぬきマザーグース』。岩波少年文庫。東京：岩波書店、2000。
- ペイン、スチュアート。『英国流ビスケット図鑑——おともに紅茶を』。ハーディング祥子・監訳。東京：バベルプレス、2008。
- 渡辺茂、編注。『マザー・グース童謡集』。東京：北星堂書店、1978。
- 渡辺茂。『マザー・グース事典』。東京：北星堂書店、1986。
- 和田誠。『オフ・オフ・マザー・グース』。東京：筑摩書房、1989。

(2021年9月30日提出)  
(2021年10月22日受理)

## Over the Hills and Far Away: Teacher Training in Yorkshire School Novels

TAKEDA, Chiaki

Faculty of Education, Saitama University

### Abstract

This paper aims to clarify British ideal on teacher training by analysing its representation in school novels by Jack Sheffield and Gervase Phinn. Based on their several experiences as teachers in Yorkshire, both authors depict the processes of young practice teachers growing into full-fledged ones. Sally in Sheffield's *Teacher* series is a female ex-hippie; Tom in Phinn's *The Top of the Dale* series is a male ex-professional football player. Describing the ordeals and achievements of these outstanding characters, both series feature the importance of new elements to stimulate older teaching staff and update their views on education. In 1970s and 80s, under Thatcherism, this was an urgent need; in Yorkshire, the most conservative region in Britain, this is a challenge; in England, the nation advocating individualism, this is reasonable and even natural. If the objective of education is to help the rising generation prepare for the future, young teachers, another rising generation themselves, should be given proper respect in designing new projects and prospects in education, as demonstrated by the cases of Sally and Tom. At the same time, it is remarkable that these attractive figures are accompanied by the familiar images of Mother Goose's nursery rhymes. Sally's story is a parody of the song "I Had a Little Cow"; Tom is a variant of "Tom the Piper's Son". This device is quite effective in presenting these star teachers in harmony with traditional culture. If incorporating the individual talent is the intrinsic attribute of English tradition as T. S. Eliot demands, stories of Sally and Tom are to be regarded not as exceptions but as the very examples of English education given considerable betterment *by* practice teachers and also *for* practice teachers to follow—hopefully in Japan as well.

**Keywords:** school novel, teacher training, teaching practice, Yorkshire, Thatcher